

☆キリストの聖体(6月14日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読 (申命記 8章2～3、14b～16a節)

モーセは民に言った。あなたの神、主が導かれたこの四十年の荒れ野の旅を思い起こしなさい。こうして主はあなたを苦しめて試し、あなたの心にあること、すなわち御自分の戒めを守るかどうかを知ろうとされた。主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった。主はあなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出し、炎の蛇とさそりのいる、水のない乾いた、広くて恐ろしい荒れ野を行かせ、硬い岩から水を湧き出させ、あなたの先祖が味わったことのないマナを荒れ野で食べさせてくださった。

第二朗読 (使徒パウロのコリントの教会への手紙 I 10章16～17節)

皆さん、わたしたちが神を賛美する賛美の杯は、キリストの血にあずかることではないか。わたしたちが裂くパンは、キリストの体にあずかることではないか。パンは一つだから、わたしたちは大勢でも一つの体です。皆が一つのパンを分けて食べるからです。

福音朗読 (ヨハネによる福音書 6章51～58節)

そのとき、イエスはユダヤ人に言われた。「わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。」それで、ユダヤ人たちは、「どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか」と、互いに激しく議論し始めた。イエスは言われた。「はっきり言うておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなた

たちの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる。これは天から降って来たパンである。先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。このパンを食べる者は永遠に生きる。」

朗読解説 ー主任司祭より皆様へー

足立教会の信徒の皆様、6月21日(日)から主日のミサを始めます。教会委員会よりのお知らせがあったと思いますが、長いお休みの期間がようやく終わりました。本当にうれしいです。古来よりキリスト者が大事に続けてきた「ミサ」。それが一時的にせよ、出来なくなったのは私たちの信仰生活にとって大打撃でした。つまり私たちの命を支えるもの、それは単に物質的な食べ物だけでなく、「キリストの聖体」があってこそだからです。だからこそキリストは私たちに「これを取って食べなさい。これは私の体」であると仰っています。キリストの体をいただくことによって、私たちの体はキリストのようになり、キリストの心をもって隣人を大事にすることができるのです。その隣人愛の力を強めるには「キリストの体」をいただくことが大事なのです。このミサが休みの間に、聖体訪問に来られる信徒の方がおられました。うれしいことでした。この新型コロナウイルスの感染予防のために社会生活が大きく乱されましたが、この社会の要請に皆様が誠実に応えられことは、キリスト者としても大事なことでした。つまりこの社会とともに生き、社会にキリストを証しするものとして、社会を守るキリスト者としての大事な務めであるからです。ドン・ボスコは青少年たちの社会における姿として「良き社会人、良きキリスト者(今年のサレジオ会の標語)」を掲げています。地域社会においてこのことを念頭に生活していきましょう。このウィルスとの戦いはまだ当分続きます。キリストの聖体が私たちに守り、力を与えてくださいますように祈りましょう。

第一朗読 (申命記 8章2～3、14b～16a節)

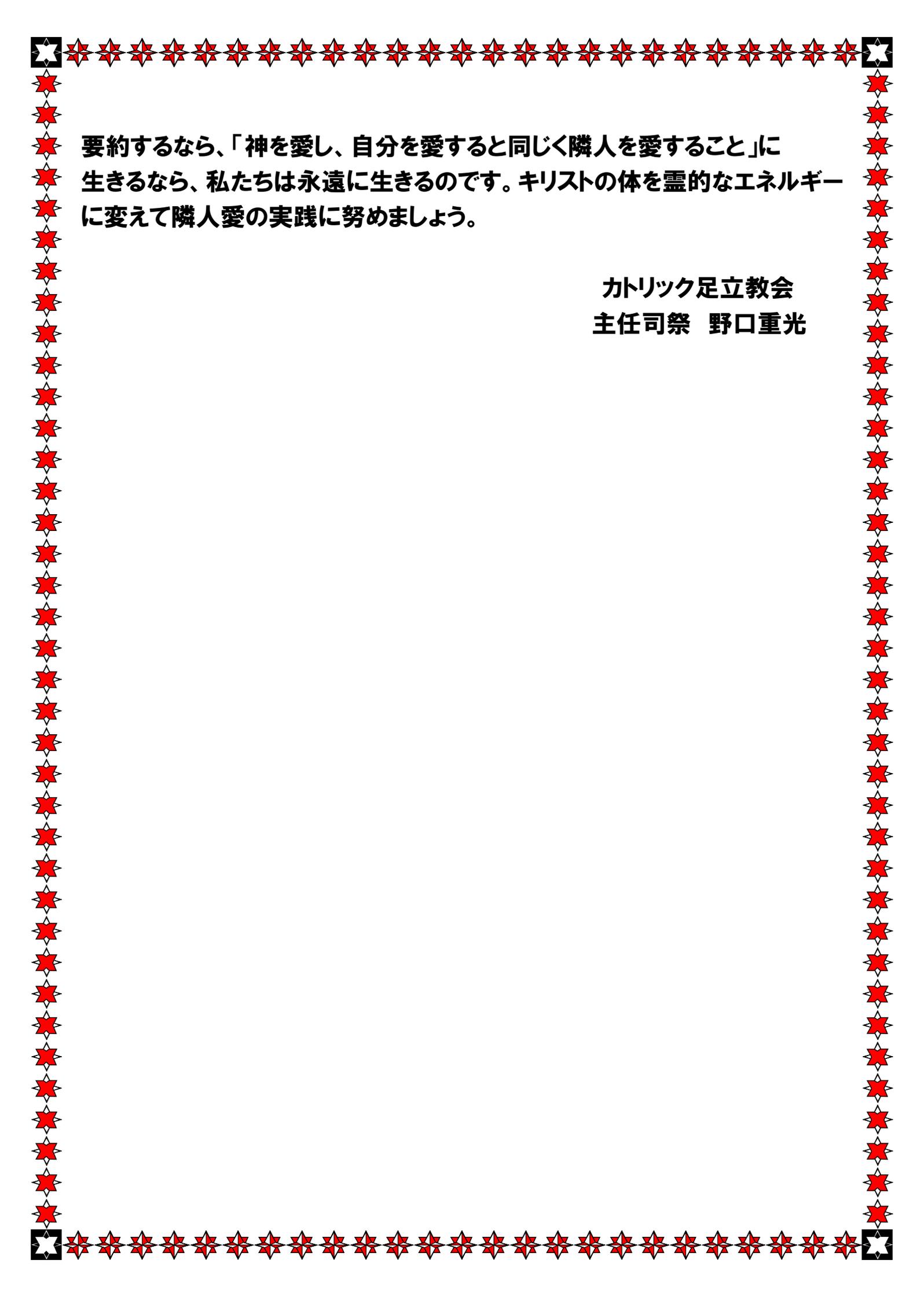
モーセは人々にマナという不思議な食べ物を主が与えられたことを話しました。それは人々が今まで食べたことのないものでした。つまり、人は生きるためには普通の食べ物(パン、日本でいえばお米でしょうか)ではなく「主が与えられる食べ物＝キリストの体」が必要であることを暗示していたのです。こう書いてあります。「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きる」と。主の口から出るすべての言葉、それはキリストに他なりません。旧約聖書のこんなに早くに主の体のことが述べられていたのですね。聖書の深さを感じます。そして、キリシタン時代に役人の目を盗んで司祭を呼び、信徒の家に集まってミサを捧げ、聖体拝領をしていた信徒の方々の信仰の深さ、勇気をも感じます。

第二朗読 (使徒パウロのコリントの教会への手紙Ⅰ 10章16～17節)

短い朗読です。「ご聖体は私たちキリスト者をつつにする」というパウロの考えです。心をつつにして生きている、仕事をしているというキリスト者の生き方を述べています。一つになって生活しているというスタイルは、単に生活スタイルのことを述べているのではありません。物事の価値観の一致ということでもあります。つまりキリストの価値観で生きていくということです。そのためにはキリストを私たちの中にいただくことが必要なのです。

福音朗読 (ヨハネによる福音書 6章51～58節)

「私は天から下ってきた生きたパンである」とイエスは言われます。先の申命記に記されている「マナ」を思い起こさせるイエスの言葉です。そしてこのパンを食べるならば、その人は永遠に生きるといわれます。人は生きるために食べ物を絶え間なく食べなければなりません。食べ物が断たれると人は死の危険にさらされるのです。さらにイエスは言われます。「先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。このパンを食べる者は永遠に生きる」。キリストの聖体をいただくこと、そしてキリストの話されたこと、



要約するなら、「神を愛し、自分を愛すると同じく隣人を愛すること」に
生きるなら、私たちは永遠に生きるのです。キリストの体を霊的なエネルギー
に変えて隣人愛の実践に努めましょう。

カトリック足立教会
主任司祭 野口重光